

今月のみことば

2015年11月



「だから、あなたがたは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです。」(マタイの福音書5章37節)

ドイツきっての優良企業と言われたフォルクスワーゲン車が、アメリカの厳しい環境基準をクリアするために、不正なソフトウェアを搭載して検査をすりぬけていた、というニュースが一瞬のうちに世界を駆け巡った。該当車両は1100万台に達する、という。

これが氷山の一角であることは誰もがうすうす感じている。データの改ざんは、あの STAP 細胞事件でも行われ、ノーベル賞候補と言われた科学者が自らの命を断つまでの騒動となった。

そして今、日本ではマンションを支える杭の一部が強固な地盤（支持層）に届いておらず建物が傾斜する、という問題が起きているが、ここでもデータ改ざんがなされていた。

「バレなければいい」という利己主義は国境を超えているようである。ヨーロッパ経済を支える「優等生」と言われてきたドイツで起きた事件だけに衝撃はひととき大きい。

しかし、実はすべて神には丸見えなのである。「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです」(ヘブル人への手紙 4:13) と書かれている通りである。人の目はごまかせても神を欺くことはできない。

それにしても、「はい」を「はい」、「いいえ」を「いいえ」と言うことの何と難しいことか。「はい」を「いいえ」、そして「いいえ」を「はい」と言うところに私たちの罪と弱さが凝縮されている。

1950年に始まった朝鮮戦争によって、日本は特需景気に沸いた。さらに儲けようと、表示を偽って粗悪品を売りつける業者が多数現れた。それでも米軍は買い続けたので、不正はさらにエスカレートしていったが、その中で、嘲られながら表示通りの製品を納め続けた業者があった。クリスチャンの波多野鶴吉が起こした繊維メーカー「ゲンゼ」である。後に破格の信用を得て、会社は大きく発展することになった。その社風は今も健在である、と聞く。

創業者の鶴吉は若き日の過ちで、凛々しかった顔が一変した。しかし、聖書の神を知り、神に従って生きることを決心した後は、「この顔を一目見ればだれもが私のことを覚えてくれる。この顔は私の名刺だ」と言って、意に介さなかった。

見せかけか、中身か。外見か、たましいか。外見はいくらでもごまかせるが、たましいは罪によってさいなまれる。

「はい」を「はい」、「いいえ」を「いいえ」と言いうるために必要なのは学歴でも教養でもなく、私たちの勇気ですらない。私たちをやがて正しく裁かれる神の前に立ち返ること…これこそがその答えではないだろうか。

